

# 三つの都市核と地域。ポテンシャルで切り拓く近未来 「世のため、後のため」精神で築く持続可能なまち

## 古代から培われてきた 地域の多彩なポテンシャル(底力)

日本一広大な関東平野のほぼ中央、群馬県と境を接する埼玉県北西部の本庄市は、平成18(2006)年1月、旧本庄市と旧児玉郡児玉町の合併により、新生・本庄市としての歩みを開始した。

旧本庄市と旧児玉町は、奈良時代には共に児玉郡を形成しており、児玉庄という名称の荘園に組み込まれるなど、当初から深い関係にあった。やがてそこから、児玉氏・本庄氏(児玉庄が分離)を名乗る武士団が古代末期に勃興したことで、本庄・児玉の地名が定着。それぞれ独自の発展を果たしていく。従って、両旧市町の合併は奈良時代末期以来の再統合とも言える。

現在の本庄市の都市全図を見て、改めて気付くのは、その「時空を超えた交通の要衝ぶ

り」だ。合併後の本庄市の市域は南北(北部が本庄地域、南部が児玉地域)に細長く延びた形をしている。児玉地域最南部の秩父郡に接する標高400〜500mほどの山間地帯(市域全体の約20%)を除いた市域は、いかにも関東平野のただ中に位置する都市らしく、おおもむ平たんな地形を呈し、本庄地域の最北部には、近世から近代初期まで江戸・東京と北関東(源流は群馬県みなかみ町)を結ぶ物流の大動脈だった利根川が流れている。

本庄地域を利根川から少し南下した位置には旧中山道(一部国道17号)が市域の東西を貫いており、利根川や中山道とほぼ並行する形で、JR高崎線(最寄り駅／本庄駅、明治16／1883年開業)が走っている。

さらに南下すると上越新幹線(最寄り駅／本庄早稲田駅、平成16／2004年開業)が、さらに南下して児玉地域に入ると、JR八高線(最寄り駅／児玉駅、昭和6／1931年開業)や国道254号が、利根川・高崎線・

よしだしんげ  
吉田信長  
本庄市長



上越新幹線にやはり並行するような形で市域を東西に貫いている。加えて、上越新幹線・

本庄早稲田駅近くには、関越自動車道・本庄児玉ICがある。

これらの交通網を市域の横軸とすれば、本庄寄居線(県道31号)や国道462号など市域を南北に貫く幹線道路が縦軸となっており、横軸と交差。総合的に見て本庄市は、東京



本庄市の取水口から始まる「世界かんがい施設遺産・備前渠水路（本庄市・深谷市・熊谷市を貫流）」は利根川の水利のシンボル



近代の本庄の威勢を示すコリント式西洋建築の旧本庄警察署（明治16年築）

「悠久とも言える長い時代を超えながら、培われてきた本庄市の多彩なポテンシャルの高さは、確実に現代にも受け継がれており、それが合併した本庄地域・児玉地域における、数々の魅力の源泉ともなっています。ただ、ポテンシャル（潜在力）は、何の《刺激》も与えられなければポテンシャルのまま眠ってしまいかねません。

まち並みの形成に長い歴史を持ち、多様な魅力を蓄積しつつ成熟した二つの都市核、



（江戸）と上信越方面を結び付ける結節点の役割を、時空を超えて果たしてきたことが（今も）分かる。

また、上越新幹線・本庄早稲田駅から東京駅までの所要時間は約50分。本庄駅から高崎線経由の湘南新宿ラインや上野東京ラインを活用すれば、本庄駅↔新宿駅間および本庄駅↔東京駅間共に約85分で到達できる。現代の本庄市は都心への通勤圏でもあるのだ。

その交通の要衝ぶりは、交通手段が水路と陸路（徒歩）だけだった時代からの特色で、穏やかな気候も含めた風土的な暮らしやすさが古来のものであることは、本庄市が県内有数の大規模な原始・古代遺跡の集積地（古墳だ

けで622基確認、271基が現存）であることが、如実に証明している。

近世の本庄市が中山道でも最大級のにぎわいを極めた本庄宿となり、近代以降に養蚕業のまちとして大いに繁栄したのも、水路と陸路の充実した物流ネットワーク機能が背景にあればこそだろう。

本庄市にはその他、国指定・県指定・市指定の文化財・史跡などが数多く現存する（現時点で総計139件）。そうした文化財の古代から中世、近世、近代まで網羅する幅の広さは、本庄市に醸成されてきた文化的ポテンシャル、それを支えた経済的ポテンシャルの蓄積が、いかに歴史的に深く継続されてきたかを物語ってもいる。

本庄地域と児玉地域のポテンシャルを刺激する存在は、第3の都市核として成長が期待される本庄早稲田地域です。

例えば、本庄市の人口は合併前の平成14（2002）年に、旧本庄市と旧児玉町を合算した約8万3400人がピークで、それ以後は全国の都市と同様、緩やかな減少を続けています（令和4年3月1日現在の人口は7万7624人）。

一方で、合併直後の平成18年度から開始した、上越新幹線・本庄早稲田駅周辺の土地区画整理事業（総面積約64・6ha、施行者：独立行政法人都市再生機構）が平成25（2013）年度に終了。開発計画が軌道に





本庄の旧市街地に芽生える新たなにぎわいの兆し「本庄デパートメント」



江戸時代の蔵を美容室にリニューアルした「クラッパ(蔵髪)」は地域コミュニティの交流拠点



民間企業が入居する「三の蔵」のオシャレトロ入り口のたたずまい

乗り始めて以降、本庄早稲田駅周辺では明確な人口増現象が始まっており、今もなお順調に続いています」

吹が生まれてくるといふこと自体が重要であり、それは既存の地域財産(ポテンシャル)の覚醒に向けた刺激剤にもなり得る。本庄市では現在、人口減少が続く本庄地域に遺された明治・大正・昭和初期の近代化遺産ともいふべき建物群を、本庄市に移住してきた若い人たちが自分たちの感性で再活用、新たなにぎわいの創出を実現する現象が、自然発生的に出てきつつある。

の場としても機能している。  
《一の蔵、二の蔵、三の蔵》は、現本庄市立図書館の近くで、明治12(1879)年〜大正10(1921)年にかけて建築された三つの蔵。もともとは酒問屋の倉庫として使われていたが、市民グループの保存運動を受けて、現在は外観を生かしたまま、カフェや民間企業のオフィスなどに生まれ変わっている。  
また、明治29(1896)年築と伝わる《旧本庄商業銀行煉瓦倉庫》(国登録有形文化財)は建築当時、融資の担保として預かった繭や生糸の貯蔵庫だった。その後、菓子店の店舗兼工場としても活用されていたが、現在はNPO運営の多目的展示施設や貸しホールとして機能。宿場町や養蚕で栄えた本庄市の歴史を発信する、まちなかの交流拠点施設ともなっている。

そう語るのは吉田信解本庄市長だ。吉田市長は旧本庄市最後の市長(任期は平成17/2005年7月〜18年1月)として、旧児玉町との合併を果たし、直後の平成18年2月に新生・本庄市の初代市長に就任。取材時の令和4年3月は5期17年目を迎えて早々のタイミングだった。

### まちなか再生と魅力創出を実現する 三つの個性的都市核

実際、人口減少のトレンドは全国共通の避けがたい課題だ。そのような中でも新たな息

例えば、令和3(2021)年秋から始まった《本庄デパートメント》は、移住してきた2人の代表社員を中心に、築100年超えの空き店舗をリノベーションし、カフェやコワーキングスペースなどを運営。そのほかにもマーケットなどを主催し、本庄市の魅力発信にも力を発揮している。安政3(1856)年築の古い蔵を美容室に造り替えた《クラッパ(蔵髪)》も、やはり本庄市に移住したヘアデザイナーの始めた事業で、地域コミュニティ

本庄市が養蚕業で栄えた時代を伝える施設としては、児玉地域に建物が現存・公開されている《競進社模範蚕室》(県指定文化財、明治27/1894年建設)も見逃せない。競進社は関東をはじめ全国に支部を設け、明治時代におけるわが国の養蚕・製糸業の改良や伝習(教育)に多大な功績を挙げた結社で、時の農商務省から功労賞も授与されている。近隣の群馬県富岡市にある世界遺産・富岡製糸場と同時代にあつて、本庄が北関東の養蚕業に重要な役割を果たしていた証しの物件とも言える。  
このように本庄早稲田駅周辺の新たなまち



# 本庄市

市 政 ル ポ

(埼玉県)



養蚕のまち・本庄の繁栄を今に伝える「旧本庄商業銀行煉瓦倉庫」



養蚕の最新技術普及に大きな役割を果たした「競進社模範蚕室」

づくりと並行する形で、旧市街地でも地域財産が有機的に活用され、連携するかのようになされたまの風景を創り始めている原動力こそは、歴史が培ってきた地域ポテンシャルの放つ魅力であり、底力ではないだろうか。

「本庄市内で唯一の人口増エリアになっている本庄早稲田地域の開発は、上越新幹線・本庄早稲田駅の設置計画と共に始まりました。本庄早稲

田駅はJR高崎線・本庄駅およびJR八高線・児玉駅という旧市町時代の二つの都市核の間点に位置しており、合併直前の平成16年3月に、地域の大きな期待を背負い、地元請願駅として設置された経緯があります。

本庄市が持続可能なまちで在り続けるためには、まずこの明らかな成長軌道を描いている新興の本庄早稲田駅周辺のエリア（本庄早稲田地域）を軸に据えること。そこを基盤に、多彩なポテンシャルを今も保持しつつ、成熟した歴史的・文化的遺構をそれぞれ温存している本庄地域、児玉地域を合わせた《三つの都市核》が共鳴し合うような、にぎわいを呼び込むまちづくりを再構築していくことが重要と考えております（吉田市長）

ちなみに本庄早稲田駅の名称は、本庄早稲田地域に立地する早稲田大学本庄キャンパスと深い関わりがある。同様に本庄早稲田駅周辺のまちづくりも、早稲田大学との連携がベースにある。

本庄市および埼玉県と早稲田大学との絆は、昭和57（1982）年、早稲田大学本庄高等学院が開校するに当たっての連携関係の構築から始まる。さらに平成5（1993）年、地方拠点都市法に基づく「本庄地方拠点都市地域」の指定により、本庄市と埼玉県、早稲田大学は「職・住・遊・学」の機能を備えた国際的な研究開発交流拠点の形成（彩の国本庄科学学園都市）における中核事業として、産学官連携研究拠点の形成を図るようになる。



早稲田大学と本庄市・埼玉県による産学官連携事業のシンボル「本庄早稲田国際リサーチパーク」のメイン施設・コミュニケーションセンター

付随して、本庄市と埼玉県は「早稲田大学本庄プロジェクト」と連携する新しいまちづくり「本庄早稲田の杜」事業の推進を決定。それらの中核施設が、現在の公益財団法人本庄早稲田国際リサーチパーク（理事長は吉田市長、敷地内は各種研究施設の集合体で、メイン施設・コミュニケーションセンター内に本庄早稲田の杜ミュージアムもある）であり、本庄早稲田駅周辺の土地区画整理事業とともに目玉事業としても位置付けられた。





本庄早稲田の杜ミュージアム(本庄早稲田国際リサーチパーク・コミュニケーションセンター内)の人気者「笑う埴輪」は本庄市マスコットキャラ「はにぼん」のモデル



本庄市市民活動交流センター「はにぼんプラザ」は移住・定住の新市民にも心強い交流拠点

「『本庄早稲田の杜』事業は、豊かな自然環境と調和したユニバーサルデザインのまちづくりを目指すものです。完成までにはまだ道半ばですが、既に活発な企業進出やニュータウンへの移住・定住が進み、先ほど申し上げましたように、本庄市第3の都市核としての存在感を發揮し始めています。

また、平成16年に本庄早稲田駅が開業するに当たっては、地

元請願駅として埼玉県・本庄市および周辺自治体からの公費に加え、企業や早稲田大学も含む各種団体・住民からの多額の寄付をいただくことができました(吉田市長)

本庄市のみならず、周辺自治体の活性化への期待も担う請願駅の設置事業は、平成10(1998)年の東日本旅客鉄道、埼玉県、旧本庄市による覚書の交換から始まり、開業前年の平成15(2003)年5月には公募で駅名も決定。平成22(2010)年10月に「本庄早稲田の杜まちびらき」を開催し、平成25年度の土地区画整理事業の終了後に行われた住居表示の変更により、現在の早稲田の杜1〜5丁目が生じた。

### 郷土の偉人・埴保己一が 体現していたSDGsの理念

ところで、本ルポのタイトルにある「世のため、後のため」という文言は、吉田市長が進める本庄市のまちづくりの根幹を成すキーワードの一つだ。本庄市の郷土の偉人・埴保己一(延享3/1746年〜文政4/1821年)の、国学者としての基本理念を端的に示す言葉としても知られている。

「令和4年1月に実施された、私にとって5期目に当たる市長選では『支えあいとチャレンジ』というスローガンを掲げましたが、これはまさに埴保己一の『世のため、後のため』という、現代のSDGsへの取り組みの



埴保己一記念館(アスピアこだま内)前に鎮座する埴保己一像

基本理念とも通じる考え方と対を成すものです。後の世まで持続する郷土を形成するには、産学官民による協働が不可欠です。埴保己一は昨年、没後200年を迎えましたが、200年以上も前にその境地に達していたこととなります(吉田市長)

吉田市長が5期目の4年間に実施するべき取り組み、すなわち「支えあいとチャレンジ」を推進するための施策として掲げたのは「①誰一人取り残さないまちづくり／②持続可能な後のためまちづくり／③賑わいを呼び込むまちづくり／④デジタル社会を見すえたまちづくり／⑤コロナに負けないまちづくり(Afterコロナを見すえて)」という5つのまちづくりビジョンだ。

「埴保己一の名前は、日本史の教科書などで誰もが一度は目にされると思います。幼少期に失明したハンディをもつとせず、国学から和歌、漢学や法律、医学に至るまであらゆる分野の学問に励み、総検校という、江戸

# 本庄市

(埼玉県)

市 政 ル ポ



本庄市の街巡りをサポートする観光案内所「本庄市インフォメーションセンター」(JR本庄駅内)は昨年オープン

時代の盲官(※琵琶・管弦奏者、按摩や鍼灸など視覚障害者の人々に与えられた官職名)の最高位に就きます。

官位の高さもさることながら、学者としての塙保己一の最大の功績は、古代から江戸時代にまとめられた史書や文学作品などを徹底的に精査し、学術的に正しい文書・作品を網羅した『群書類従』(666冊)、『続群書類従』(1185冊)を編纂したことにあります。

特に『群書類従』『続群書類従』をまとめている過程の手法は、優れて科学的です。虚偽や不正確な情報・成果などを徹底的に排除し、本物の情報や学問的成果だけを精選・集成する手法は、まさに現代のような情報過多の時代にこそ必要な態度と言えます(吉田市長)

吉田市長が掲げる5つのまちづくりビジョンのうち「デジタル社会を見すえたまちづくり」における目玉事業「DX化(デジタルトランスフォーメーション化)」は、周知のように、単に先端の各種IT技術を駆使して役所内の業務効率化や生産性の向上を図ることだけを意味するのではない。最終的な目的は、最先端のデジタル技術を用いることで、市民生活および産業振興を含む地域社会全体のよい意味での変容を促進することにある。

ここで重要なのは、何を選び、何を捨て去るかを的確に判断する人間ならではの「編集・編さん能力」と、それをいかに標準化するのだ。『群書類従』などを編さんする際に塙保己一が採った、徹底的に本物を精査・峻別する方法論は、まさにDX化を図る際の《肝》の姿勢に通じる。視覚障害を持っていた塙保己一は、本庄市や埼玉県のノーマライゼーションの象徴でもあるが、同時にDX化の先駆者とも言えるだろう。

「塙保己一は本庄市の教育理念のシンボルでもあります。現行の『本庄市教育大綱(平成30/2018年度〜令和4年度)』は基本理念を《世のため、後のための教育》とし、未来を切り拓く人を育むことにより、歴史と文化が薫るまちの実現を目指しています。

本庄市は東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催に際し、パラリンピックに参加した《トルコ共和国選手団》のホ



パラリンピック「ブラインドサッカー・トルコ共和国代表チーム」との交流は子どもたちにとって最高の思い出

ストタウンともなっていますが、それも塙保己一の存在が機縁となって実現したものです。『世のため、後のため』に数々の偉業を成し遂げてきた塙保己一という存在そのものが、本庄市が持続可能なまちとして存在し続けるための、精神的な推進エンジンともなっているのです(吉田市長)

本庄市の多彩なポテンシャルが、三つの都市核の構築や「世のため、後のため」精神に基づき、さらなる魅力や成果を加えていくのか。今後の推移が楽しみに待たれる。

(取材：文〓遠藤隆／取材日〓令和4年3月9日)



パラリンピック「テコンドー・トルコ共和国代表チーム」との交流はオンラインで実施